
milk味のキス

城崎由良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

milk味のキス

【Zコード】

Z2416H

【作者名】

城崎由良

【あらすじ】

はじめてのBLのため、BL好きの方には物足りないかと思いま
すが、暇つぶしとして軽い気持ちで読んでください。

運命とは、時に残酷で、冷徹だ。それは誰もが生きている上で実感する、「ごく当たり前のことなのだろう。けれども僕らは、大人であっても子供のように、運命を拒否しようともがく。子供たちも、大人達のように、運命から逃れようと暴れることがある。

どちらがどちらで、どちらがどちらであろうと構いなく、僕ら人間は素直に残酷な運命を受けとめられない。

それはいい事なのか悪い事なのか。その問いに答えはない。きっと全知全能の神であるうと、簡単には答える事は出来ないと思つ。

僕の名前は仙道由貴^{センドウユキ}。他人から見ればどうでもいい事ばかりを考えているらしい、四原学園の高等部一年。

屋上のフロンスにもたれて、空を見ていた僕は、朝食代わりの牛乳パックに刺したストローをくわえたまま、ただただ空を見ていた。

その行動は、今日に限らずいつもしていることで、もはや習慣となっているから、止める気はさらさらない。それに

「由貴、またここにいたのか」

今日もまた、僕は彼に声をかけられて、自分の世界から現実の世界に引き戻される。

こんな単純な事を毎日繰り返している僕らは、物好きだと人は言うだろう。

学校の屋上で考え事をしながら朝食を摂り、彼が来るのをここで待つ。僕にとってはこういう日常は、嫌いではない。きっと彼も同じように考えているに違いないだろ。毎朝、屋上にいる僕に声をかける。そんな日常を、彼は嫌ってはいないと思つ。

わかるんだ。

だって、僕らは似たもの同士だから。

「おはよう。優太」

「…おはよう」

僕が振り返つて笑いかけると、彼もぎこちないながらも笑顔で返してくれる。

振り返った顔に合わせて、屋上のドアの前にいる彼に体を向けた。手に持ち直した牛乳は、もう飲み終えていた。

「やっぱ牛乳だけじゃお腹ふくれないね」

「…」

優太は僕の前に坐つてきくると

「どううな

といって、僕の唇に、自分の唇を重ねた。

僕も負けずに彼を求めるように、牛乳を離した右手で、彼の頭を押さえた。

「ん

お互いの息が熱くなるにつれて、キスも深くなる。

運命とは、なんと残酷なのだろう。

僕らは出会ってしまった。

お互いに惹かれ合い、結ばれることはないと分かっていても、離れることは出来ない。

悲しい、悔しい思いが胸を渦巻く。

「由貴」

でも、この声が聞こえるだけで、僕は幸せなんだ。

運命なんて、残酷だとしか思えない。

けれど、僕に幸せを教えてくれた君に出会えたのが、運命のせいでどうのなら、嫌いにはなれない。

いつか僕らには、別れなければならぬ日が来るだらう。

兄と弟。

この壁は、とても大きい。

でも、君を愛しいと思う気持ちは、もっと大きい。

大きいんだ。

(後書き)

初めてのBL挑戦。やや不満足な出来になってしまったが、皆様の暇つぶしになつたのなら、嬉しいです。読んでください、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2416h/>

milk味のキス

2010年12月13日05時58分発行